

人の生死にかかる介護労働者に「派遣」が増えているという。介護の現場で何が起きていたのか? グッドUILの「派遣ヘルパー」を体験した筆者がその恐るべき実態を訴える。

白崎 朝子

写真はイメージです。本文とは関係ありません。



一〇〇七年秋、私はあるグループホームにボランティアに行く。そこには「派遣ヘルパー」が働いていた。人材派遣会社グッドUILから派遣されているのだという。一〇〇七年六月の厚生労働省によるコムスンの事業所指定取り消し処分の影響でスタッフが離職。人手不足を補うため派遣ヘルパーを導入せざるを得ないということだった。その時点が必要な人員の半分以上を派遣ヘルパーが支えていると聞き、驚愕した(このグループホームはその後もスタッフの離職が相次ぎ、スタッフの九割近くが派遣という事態になつた)。

私はこの時初めて「派遣ヘルパー」という存在を知つた。後に同じ介護職の友人たちに聞いても、派遣ヘルパーの存在を全く知らない人もいた。しかし有料老人ホームで働く友人からは「私の職場にも派遣ヘルパーがいるわよ。仕事がすごくできる人から、全くできない未経験の人までさまざまよ」と内情を聞いた。深刻な

人手不足を痛感した。
そんな折、グッドUILの派遣ヘルパーの求人を見つけた。時給は介護福祉士の資格があると一三〇〇円からだつた。求人広告で見るヘルパーの時給は、パートの場合、九〇〇円~一〇〇〇円が相場だ。派遣ヘルパーの時給の高さに驚いた私は、自分が派遣ヘルパーになつて働いてみることにした。

などは一切なかつた。
電話で尋ねても、コーディネーターは現場の内情をほとんど把握していない。メール一通で派遣されたのは、自宅から一時間半以内で通勤できるグルーブホーム、デイサービス二カ所、そして小規模多機能ホーム二カ所、そして施設側のスタッフと派遣看護師の連携が悪く、バイタルチェックをした。どの施設にも共通していたのは、即戦力を要求されること。グッドUILの場合、派遣される現場が基本的にスポット派遣だからだ。

ショーンも研修もなく、派遣先でもぶつつけ本番。いきなり重介護をさせられた。利用者の名前、年齢、既歴、感染症の有無など、介護をする上で最低限必要な情報すら知らされず、一番事故が起きやすい入浴介助が主たる業務だった。

デイサービスでは看護師さえもスポット派遣の場合があつた。普段の利用者の身体状況を全く知らず、利用者台帳すら読んでいない看護師が業時間、持ち物、服装などで、どんな施設か、利用者の情報や注意事項

どうかの医療的判断をしていた。派遣の看護師も、きちんとしたオリエンテーションがないために右往左往しており、同じ初日の私に仕事の仕方や物品の場所などを聞いてくる。施設側のスタッフと派遣看護師の連携が悪く、バイタルチェックをしていない利用者を誤って入浴させたこともあつた。幸い事故にはつながらなかつたが、もし血圧が高ければ、入浴中に倒れていた可能性もある。

最も衝撃的だつたのは、利用者が目の前で心肺停止した事故だつた。その利用者は病み上がりで、週に一度来ている派遣の看護師は、微熱があるからと入浴は中止したもの、ベッドに寝かせることもなく、フロアで過ごさせていた。私が入浴介助から戻りしばらくした時、その利用者は突然喘ぎ始め、たちまち心肺停止に至つたのだ。救急車の到着は心肺停止から五分以上経過した後。その間、職員と派遣の看護師が懸命に蘇生術を施したが、意識も呼吸も戻

らず、救急隊が到着後電気ショックをしても意識は回復しなかった。心肺停止状態のまま施設長に付き添われ病院に運ばれた。実は、この事故が気掛かりでもう一度この施設に派遣してもらったのだが、その利用者は亡くなつたということだった。

ほつかない利用者を引っ張るよう¹に助けていたのを見て、いつか転倒事故が起きたのではないとかひやひやした。その施設の社員は一人だけ。あとはパートとスポットの派遣ヘルパー、そしてスポットの派遣看護師という二種類だった。その施設でも一

に送り出している家族は、こんな忙ざかしい中で、
様々な介護状態や、派遣が介護や医療
を担っていることを知っているのだと
思うか……』と疑問が湧いた。

に送り出している家族は、こんな社
撰^{さん}な介護状態や、派遣が介護や医療
を担っていることを知っているのだ
ろうか……」と疑問が湧いた。

しかし施設内では人手が多く、時
間に追われていた。一度しか来ない
かもしれないスポット派遣のヘルパ
ーに、いちいち利用者の説明なんて
していられない、という雰囲気が漂
っていた。最低限のマニュアルすら
手渡されなかつた。

それでも、派遣の私に利用者の注
意事項や介助方法のコツなどを教え
てくれた社員もいた。しかしその社
事業停止処分を受けた直後だつた。

判しており、退職して他の施設に行
くと話してくれた。その社員がいな
くなれば、情報をくれないパートス
タッフの指示で働かなければならな
い。派遣された私の負担はそれまで
とは比較にならないほど厳しくなる
上に、介護事故の危険性も高まる。
その施設ではあと三回仕事をする予
定だったが、事故のリスクを回避す
るためにキャンセルした。あまりに
介護負担が重く腰痛となり、治療を
受けている鍼灸師から休養を勧めら
れてもいた。折しもグッドウイルが
事業停止処分を受けた直後だつた。

介護事故や〈感染〉の不安

あるデイサービスではヘルパー資格のない派遣の送迎ドライバーに体操やゲーム、バイタルチェック、水分補給などの介護業務をさせていた。年輩のドライバーの男性から「自分たちは『利用者の送迎と施設内の雑用をしてほしい』と会社から言われて派遣された。しかし無資格なのに介護業務までさせられて当惑している」と聞き、戦慄した。

資格があれば仕事ができるというわけではない。しかし、もう一人の若いドライバーの男性が、歩行のお

怖がる思い知られた。看護師が派遣というのは労働者派遣法の上では違法ではない。しかし、介護現場を知る仲間たちに話すと、怖い、信じられない、という声が圧倒的だ。

職員が定着せず、看護師まで派遣に頼らざるを得ない構造こそが介護事故を生み出す。そのことを痛感した事故だった。

を二時間でしなければならなかつた。
介護を行なうこちら側も初めてで緊張するが、介護される利用者も、初めて会うヘルパーにはかなり緊張するだろうと、心底利用者が気の毒だつた。「利用者をこのデイサービス

それでも、派遣の私に利用者の注意事項や介助方法のコツなどを教えてくれた社員もいた。しかしその社員も給与の低さと体制の杜撰さを批



筆者が応募したグッドウィルによる派遣ヘルパー等の求人広告。

(2007年11月『Town Work!』)

「こした場合、損害賠償保険はあるのでしょうか？」と質問したところ、「損害賠償保険には加入していません。派遣の看護師さんは自分で損害賠償保険に入っているようですが」と即答された。この会社はグッドウイルと違ったが、派遣ヘルパーという働き方は命がけの行為なのだと痛感した。



また、ある施設では、結核の利用者情報を就業時間終了間際に看護師から聞いた。副作用があるからと家族が薬を服薬させていないといふ。

その看護師は他の利用者への感染を心配し、施設長が家族とちゃんと話し合いをしないと怒っていた。

ト除去をさせられている日雇い労働者が、原発の下請け労働者のようだ

派遣ヘルパーになつてすぐに私の脳裏に浮かんだ言葉である。利用者の情報を全く開示されないにもかかわらず、血液や体液と接触する身体介護業務が当たり前だったからだ。

利用者への二次感染だけでなく、スタッフが菌の運び屋にならないか？

うがい・手洗いなどは介護業務の基本なので、たとえ派遣先から感染症の情報開示がなくとも、実行する

内容から考えると派遣先で感染する確率は一般的の仕事よりも高いのではないか。スポット派遣ゆえに、いつどこで感染したのか因果関係も特定しづらい。派遣ヘルパーという働き方は、非常にリスクが高い。そんな

結論に達した。

グッドウイルに登録をした当初は「時給も普通よりは良いし、いろいろな現場を経験し、スキルアップしたい」と思っていた。しかし、実態を知るにつれ、派遣ヘルパーとして働くことへの危険性を感じた。折し

内容から考えると派遣先で感染する確率は一般的の仕事よりも高いのではないか。スポット派遣ゆえに、いつどこで感染したのか因果関係も特定しづらい。派遣ヘルパーという働き方は、非常にリスクが高い。そんな

介護保険から八年の現実

かつて私は、ある地方自治体の公

務員ヘルパーだった。介護保険移行期、公務員ヘルパーは必要ない存在

と見なされ、同僚たちの絶望は深かつた。私もまた、そんな移行期の嵐に心身ともに限界となり退職した。

昨年秋から今年一月にかけて、私はボランティアや派遣という立場で介護現場に身を置いた。現在の介護現場を知るにつれ、公務員として行なつていた業務が、利用者にとってもヘルパーにとつてもいかに丁寧な内容だったかを思い知らされた。

介護保険施行から八年。介護労働現場の悲惨な実態と離職率の高さや深刻さがやっと報道されるようになつた。介護の仕事では家族を養えない、結婚できないと、男性介護労働者の「結婚退職」が問題になつていい。それにも増して私が感じる深刻さは、長く経験を積んだヘルパーがほとんど居なくなつたことだ。どの現場でも私以上に長いキャリアがあるヘルパーには出会えなかつた。

私が派遣で行った施設はほとんど

も、時給が安く有期雇用のパートではあつたが、職員の定着率が高い施設から誘いがあり、その施設への就職を決断した。利用者の状況をきちんと把握し、その場限りでない、地道で継続的なケアをするという介護の基本に立ち返りたかったからだ。

職員ヘルパーという不安定な働き方を守る最前線にいる介護労働者。しかし、介護労働者の生存権はかえりみられてはいない。

派遣ヘルパーという不安定な働き方は、利用者にとつても不利益なのは言うまでもない。だが、そんな働き方を生み出したのは介護保険の報酬の低さにある。私のささやかな体験から考えても、派遣ヘルパーの介護事故は常態化していると予想される。しかし施設という密室の中で、闇に葬られているのだろう。

「希望がなければ頑張れない」と私はメッセージをくれた友人がいる。私の周辺の介護労働者は皆、「介護の仕事が好きだから」と頑張つて現場を支えている。いのちに寄り添う仲間たちと希望の光を見出したい。

二〇〇九年は介護保険の見直しがある。この秋が改革の正念場だ。現場からしっかり声をあげていきたい。

写真撮影／石郷友仁
しきさき あさひ・介護福祉士

「いのちの現場」で派遣がすすむ

見落とされている

医療や介護の現場で派遣の看護師が増えている。中には違法性の高い日々(日雇い)派遣の実態もみえ現場からは過酷な労働に悲鳴があがる。派遣看護師の問題を追つた。

自崎朝子

新型インフルエンザの感染が急増した二〇〇九年一〇月、佐々木淑子さん（三九歳）は、看護師としてある公立高校の修学旅行に付き添つた。時期が時期だけに、初日から高熱を出す生徒が相次ぎ、連日、病院受診

や看護など、徹夜に近い状態で対応に追われた。新型インフルエンザと診断される生徒が数人出始める中、ついに自身も発熱。仕事の予定が連続して入っており、このままでは次の学校に自分がインフルエンザを持ち込みかねない。登録先の医療系人材サービス会社A社に交代を要請したが、「急なので難しいかも知れない」と言われた。幸い代替の看護師が見つかり、次の付き添いはキャンセルできましたが、しばらくは体調不良で自宅療養を余儀なくされた。

業務内容欄には「旅行添乗応急手当・健康管理業務、労働者派遣法第四〇条」の「日数限定業務に該当」と記載されている。これが一般職といえるのか。

この仕事での佐々木さんの賃金は一日一万三〇〇〇円で就業時間の記載はない。かりに八時間労働として

責任が重く 過酷な訪問入浴

看護師専門の人材派遣会社B社に登録している湯川のそみさん（仮名・四〇代）は、昨年夏、日々派遣の看護師として訪問入浴ステーションで働いた。訪問入浴とは在宅で寝

「手洗いをさせてもらえないのは、看護師の健康だけでなく利用者から利用者への感染症の媒介になる可能が高く、利用者・派遣看護師・へリパーたちにとつても悲惨な状況で介助が終わっても、手洗いすらさせてもらえず、昼休みもトイレ休憩もなく働かされることもしばしば。

たきりになつてゐる高齢者や障害者の自宅への浴槽持ち込みの入浴サービス。看護師、ヘルパー、オペレーター（運転・運搬など兼任）各一人、計三人のスタッフがチームとなつて、入浴介助をするサービスだが、労働環境は過酷だ。一日の訪問件数は六

本人説の看護師募集広告「派遣看護師」とは明示していないが、実際には、人材派遣会社の募集が目立つ。

